京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成28年11月7日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長　辻　井　昭　雄　様

所属部局　医学研究科内科学講座臨床免疫学
職　　名　教授
氏　　名　三森経世

助成の種類	**平成 28年度　・　国際会議開催助成**	
国際会議名	(和文) 第13回国際自己抗体・自己免疫会議 (英文) 13th International Workshop on Autoantibodies and Autoimmunity	
開催期間	平成28年10月11日　～　平成28年10月13日	
開催場所	ウェスティン都ホテル京都	
参加者	総数 243名	内訳 海外97名、国内146名
成果の概要	**タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　☑ 無　☐ 有(　　)**	

会計報告	事業に要した経費総額	30,600,000 円
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円
	その他の資金の出所	参加費　6,950,000円
		助成金・寄付金　4,650,000円
		広告関係費・共催セミナー・展示　18,000,000円

経費の内訳と助成金の使途について

費目	金額 (円)	財団助成充当額 (円)
旅費交通費（運営準備・招待者宿泊・交通費	6,000,000	
会場・会議費（機材、看板、運営要員）	11,000,000	1,000,000
飲食・行事関係費	4,000,000	
印刷製本費（HP・ポスター/チラシ・プログラム集・配布物	2,500,000	
通信運搬費	500,000	
消耗品費	600,000	
事前準備業務費、事後処理費	6,000,000	

当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回の助成は大変ありがたく、会議運営に有意義に使わせていただきました。

成果の概要／三森経世

2016 年 10 月 11 日（火）から 13 日（木）の 3 日間にかけて、ウェスティン都ホテル京都において、第 13 回国際自己抗体・自己免疫会議（13th International Workshop on Autoantibodies and Autoimmunity: IWAA）が予定通り開催され、20 カ国から 243 人の招待と参加を得て、成功裏に終了した。

本会議は世界各国から免疫学および臨床免疫学に関わる様々な領域の第一線の研究者が一堂に会し、自己免疫の病因・病態、発症機序、診断や治療に関する基礎的・臨床的な最新の研究成果の発表と討論を通じて、医学・医療の進歩発展に寄与することを目的としており、1989 年に第 1 回会議がハイデルベルグで開催されてから、ほぼ 2 年ごとに世界各地で開催されてきており、日本での開催は 2001 年（淡路島、会長：山本一彦 東京大学教授）以来、2 度目の開催となった。

本会議は、特別講演、基調講演、シンポジウム、一般公募演題で構成された。

基調講演では、国内外の著名な免疫学者による講演が行われ、近年の免疫学、臨床免疫学、リウマチ学研究の進歩と最新の研究成果が集約的に講演され、多数の参加者が熱心に聴講した。基礎免疫学研究では、Duke 大学（米国）の Thomas Tedder 氏による制御性 B 細胞の基礎と応用についての発表や、大阪大学の荒瀬尚氏による HLA 分子の新しい病理病態機序についての発表など、画期的な成果発表が目立った。臨床免疫学研究では、Leiden 大学（オランダ）の Tom Huizinga 氏による関節リウマチの新規自己抗体の病因機序に関する画期的な成果や、ソウル大学（韓国）の Yeong Wook Song 氏によるベーチェット病の末梢血リンパ球プロファイルに関する最新の成果がなど、次世代の分子標的療法開発につながる重要な研究情報が紹介された。いずれも充実した内容であった。

最も格式の高い 2 つの特別講演は国内外で同分野における最高の演者を招いて行われた。世界的に有名な免疫学者である大阪大学の坂口志文氏は、独創的な制御性 T 細胞に関する基礎研究の成果と臨床応用の可能性について講演した。今回の最年長講演者である Scripps 研究所（米国）の Eng Tan 氏は、関節リウマチの免疫学的研究について古典から最新までの歴史を紹介し、聴衆の敬意を集めた。

シンポジウムは 3 つあり、基礎免疫学から 1 つ、臨床免疫学から 2 つのテーマを挙げ、それぞれ、約 6 名ずつの国内外から招待された一線の研究者により熱意ある討論がなされた。シンポジウム 1 とシンポジウム 3 では、それぞれ、近年進捗があった特発性炎症性筋疾患および自己免疫性精神神経疾患の病態解明について最新の研究成果が報告された。シンポジウム 2 では、新概念が提出され注目されている胚中心免疫機構の研究成果について、世界を代表する研究者が討論を行った。

一般公募演題では、主に国内外の若手研究者が、口演およびポスターで発表した。口演は 2 日目と 3 日目に計 11 題の発表がなされた。医薬基盤・健康・栄養研究所（大阪）に所属する Hyun Lee 氏による新規化合物の免疫抑制効果の発表や、Buffalo 大学（米国）の Long Shen 氏によるシェーグレン症候群の新規自己抗体についての発表など、若手を中心とした演題が多くあり、世界的な研究者から刺激的な質問と助言を受けていた。ポスター討論は 1 日目と 2 日目に計 97 題の演題が発表された。主に若手の研究者がポスター前で成果を発表し、国内外の参加者からの質問に答えていた。ポスター会場が本会場の後方に設置されていたため、

移動の必要がなく、気軽にアットホームな雰囲気で意見交換をすることができると好評だった。また、本会議組織委員が一般公募演題から優秀演題を審査・選定し、大阪大学の西出真之氏ら 8 名の受賞者に IWAA Award を授与した。

上記すべての講演および討論による成果は、新たな免疫学研究の展開の促進と若手研究者の育成に貢献し、我国および世界の基礎免疫学・臨床免疫学の発展に寄与するものである。

本会議の運営面では、1 名の急遽来日できなくなった海外役員のために、プログラムの差し替えを行ったが、それ以外には、全プログラムを問題なく終了することができた。緊密で情報量が多いプログラムであったが、注意深い時間管理により、全日程で遅滞なく進行することができた。

本会議終了後、国内外の多数の参加者から本会議の成果を称賛する反響が寄せられた。特に、最前線の講演者を配置したため、学問的に質の高い内容であった点と、運営面での努力により、多岐にわたる分野からの講演および討論を集約的に聴講できた点が、高く評価された。本会議を日本で開催し成功裏に終えることができたことには大きな意義があった。